

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32510

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870690

研究課題名(和文)江戸期日本における中国戯曲受容史及び唐話学と文学創作との関係

研究課題名(英文)A study on the Acceptance History of Chinese Drama and the Relation between Towa Study and Literary Writing in Tokugawa Japan

研究代表者

及川 茜(OIKAWA, Akane)

神田外語大学・外国語学部・講師

研究者番号：40646725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：江戸期日本における中国戯曲受容史について、先行研究を整理した上で、実際に上演される芝居としての側面と、文字によるテキストとしての側面の双方から考察した。かつ、特に都賀庭鐘の『四鳴蝉』『呉服文織時代三国志』を例に、当時の執筆環境を中国語と日本語の重層的な言語空間として捉え、同時に唐話・唐音学習の側面からも検討することにより、多言語的空間での創作について現代にも通じる問題として考察した。

研究成果の概要(英文)：The project firstly begins from a review of the acceptance of Chinese drama in Tokugawa Japan, and then examines those dramas both as performed texts and written texts. Secondly, focusing on Tsuga Teisho's works named 《Shimeizen》 and 《Kureha Ayaha Jidai Sangokushi》, this study discusses bilingual literary space in Tokugawa Japan, especially in the view of Towa studies, as the timeless theme of bilingual writing.

研究分野：日中比較文学

キーワード：都賀庭鐘 白話小説 中国戯曲 中国演劇 唐話

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 先行研究

江戸期の日中比較文学研究においては、これまで主に日本の作家が中国の諸作品から影響を受けつつどのように自分の作品を産み出してきたかという点が注目されてきた。特に読本の鼻祖として山口剛・中村幸彦ら各氏により中国文学との関連から議論が重ねられてきた都賀庭鐘研究では、徳田武『日本近世小説と中国小説』(1987)『近世近代小説と中国白話文学』(2004)所収の各論で、庭鐘の各作品についてかなりの部分で中国作品に原拠を有する箇所が明らかにされ、その翻案の手法も詳しく分析されるに至っている。

日中の各作品どうしを結びつける線が順次見いだされつつある状況において、個々の作品を点として捉えるのみならず、それぞれの文学史における位置づけから全体の流れの中で捉え直す作業に着手する段階を迎えている。すなわち、中国の作品とそれに基づいて生まれた日本の作品を、表面に現れた字句や趣向、筋の共通性に注目することに加え、中国文学において白話小説及び戯曲が生まれた背景や読まれた文脈にも注目し、それが日本での受容に際しどのように変化したかを動的に考えてゆくことが必要である。

### (2) これまでの研究との関連

上述の問題意識に基づき、筆者は都賀庭鐘を例に中国白話小説及び戯曲の日本文学における受容をめぐる研究を進めてきた。

まずは『英草紙』『繁野話』について、比較文学的見地からの考察を試みた。その目的としては、白話小説が読本に与えた影響を文体の面から検討し、中国語の文言と白話という二種の文体が、庭鐘にはどのように認識されていたかを明らかにすることである。また、原話である白話小説もそれぞれに文言小説などの原拠を有する一種の翻案作品である点に注目し、再創作に際しての白話小説作家と庭鐘の姿勢を比較することを試みた。こうした考察を経て、庭鐘の創作は、中国小説の無批判な受容ではなく、馮夢龍はじめ中国の作家と作品を通じて対話を試みたものであるとの結論に達した。原話となった白話小説で試みられた手法を大体においては模倣しつつ、そこに展開された道徳観や人生観に対して庭鐘は自分の作品内で逐一検討を加え、おおむね同じ筋を利用しながらも原話に対する批判を展開している。

これら読本が中国小説を日本語によって批判的に再構成したものであるのに対し、庭鐘は日本演劇の漢訳『四鳴蝉』において、中国語によって日本の戯曲を再構成することも試みている。『四鳴蝉』については翻訳という営為との関係から、母語から非母語へ翻訳されたものであるという側面に焦点を当て、非母語での執筆という庭鐘の営為の有す

る意義を論じてきた。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本の作家が中国文学の影響下に生んだ作品を、中国の作家との作品を通しての対話の成果であるにとらえ、作者がどのような対話の姿勢を持ち、中国の作品に対峙してきたかを考察する試みである。ここで注目すべきは、江戸期の読本作家の多くが、漢土の地を踏むことはおろか、中国人と直接の接触を持たなかったと考えられる点である。そこにおいて、唐話学習の流行は、これまで視覚的に理解していた中国語を音声として受け止めると同時に、また自らも発音することにより身体的な感覚として受容することであったと思われる。文字や図像という視覚的刺激に加え、中国語の音声という聴覚への刺激、ひいては身体感覚を通じて想像・理解された中国の姿を描き出すことを当初の目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 文献資料の収集・調査

翻刻されている白話小説及び戯曲の翻訳・訓訳といった資料の購入に加え、国立国会図書館や長崎の各図書館・資料館など国内の収蔵施設で資料調査を行った。

まず、日本における中国戯曲の受容史を中心に、当時の文献資料の収集並びに分析を行った。芝居として実際に上演されたことが確認されているのは長崎の唐人屋敷においてであるため、既に知られる上演以外の当時の公演に関する記録を求め、文献資料の収集と整理作業から始めた。

国立国会図書館など首都圏の収蔵施設での調査の後、2014年2月23日から3月2日までの8日間にわたり長崎県立長崎図書館及び長崎歴史文化博物館に於いて調査を行った。この際に長崎県立長崎図書館にて4点、長崎歴史文化博物館にて44点の資料を閲覧し、うち40点を複写した。

### (2) 中国(福建省)での現地調査

中国演劇の日本における上演の実態を考察する上で、中国の地方劇との関係に注目し、2015年2月21日から3月3日までの11日間にわたり、福建省諸都市での調査を行った。行程と調査地は福清市(2月21-23日:黄檗山萬福寺・石竹寺)泉州市(同23-26日:華僑歴史博物館・海洋交通博物館・泉州博物館・府文廟・南音芸苑・梨園古典劇院・泉州木偶劇場・玄妙觀・閩帝廟)福州市(同26-3月1日:福建省非物質文化遺產博覽苑・芳華劇院・烏山古建築群・裴仙宮・天后宮)廈門市(同1日-3日:廈門市博物館・廈門大学・華僑博物館)であり、各所で博物館などの収蔵資料を調査する傍ら、高甲戲・閩劇などの現在の上演や古戲台の保存状況を調査した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 江戸期日本における中国戯曲受容史

江戸期日本において、中国戯曲は実際に上演される芝居としての側面と、文字によるテキストとしての側面を有した。読み物として享受すると同時に、能や歌舞伎といった日本の演劇に重ねて想像を働かせることにより、中国芝居の上演の実態を脳裏に描いていたと考えられる。その過程を考察するには、まず日本国内での実際の上演状況がある程度まで明らかにする必要がある。

##### 先行研究の整理

文献に上演の記録が残る場所としては長崎唐人屋敷が挙げられるが、演者や演目など上演の実態についての詳細はなお不明な部分が多い。初年度はまず長崎の唐人に関する先行研究の整理から着手した。その上で長崎での現地調査を行ったが、都賀庭鐘を初めとする日本の文人が実際に中国演劇の上演を目にする機会は、大田南畝のようなわずかな例外を除いては無かったであろうという当初の予想を覆す資料には至っていない。

一方、中国演劇でうたわれる唱については、演劇から独立して受容されていたことが考えられる。そのため、長崎唐人関連の調査と並行して清楽に関する先行研究を調査した。しかし、都賀庭鐘に関しては明楽との接点は想定されうるものの、清楽の流行は彼の在世時より後になるため、『四鳴蝉』の制作時点で中国演劇の音楽にどの程度接触していたかということは突き止め得なかった。

これらの作業の過程で、中国演劇は戯曲テキストの形で読み物としての側面から受容されていたことに加え、音楽の受容に関しても詳細な検討が必要であることが明らかになった。特に、清楽と中国演劇、特に地方戯とを関連づけてゆくことは、日本における中国演劇の受容を考える上で不可欠の作業といえよう。

##### テキストとしての戯曲の受容の考察

本研究においては唐人屋敷での実際の上演そのものの姿を明らかにすることよりも、当時の日本の文人たちの中で中国演劇がどのように想像されていたかに重きを置いた。すなわち、当時の筆記や随筆といった文字記録を中心に、中国戯曲に関する記述を洗い出す作業を行った。

また、『元曲選』を初めとして元雑劇のテキストも日本に渡来しており、その読書記録も多く見られるにもかかわらず、翻案作品としては李漁を初めとする明伝奇作品に基づくものが目立つのはなぜかという問題意識の下に考察を進めた。

##### (2) 唐話学と文学創作の関係

唐話学と文学創作の関係については、唐話の音声言語としての側面に着目して研究を行った。また同時に、戯曲の翻訳・翻案の検

討を通じ、中国語と日本語の重層的な言語空間としての当時の執筆環境を、唐話・唐音学習の側面からも検討することにより、現代にも通じる問題として多言語的空間での創作について考察した。

具体的には、唐話学習教材及び工具書、白話小説・戯曲の訓訳、日本人作の白話文、白話小説・戯曲の日本語による翻案の四種について文献の収集を行い、唐話に関する語学的側面と思想哲学的側面からの先行研究を参照しつつ、唐話・唐音の知識がどのように文学創作に影響したかを分析した。

##### (3) 学会・研究会での報告

国内・国外の調査を含め、得られた知見に基づき以下の報告を行った。

「未知なる舞台への想像、話せぬ言語への翻訳 都賀庭鐘『四鳴蝉』をめぐる」

『四鳴蝉』においては、能、歌舞伎、人形浄瑠璃という日本の演劇を中国戯曲の体例に則って翻訳するというジャンル間の migration、さらに日本語のテキストを中国語に訳すという言語間の migration の試みが看取される。庭鐘が『四鳴蝉』で行った言語における migration の試行とは、「古人」すなわち時代と言語の相違によって隔てられた手の届かない他者に接近することであったといえよう。翻訳に際しては中国戯曲の形式を踏襲してはいるものの、実際の上演は前提とされず、そもそも庭鐘は中国戯曲の上演を鑑賞したことすらなかったという点。これは中国戯曲の日本での受容が、文字テキストに偏ったものであったことを反映している。

また、当時の口語に近い白話を交えた中国語に訳しているが、庭鐘の中国語の能力は主に読み書きに限定され、たとえ中国語の音声に触れる機会があったにせよ、実際の会話の能力はほとんど持たなかったと考えられる。加えて、読者として想定されるのは庭鐘と同様の日本語話者であり、中国の読者ではない。

見たことのない舞台を想像し、話せない言語へと翻訳する『四鳴蝉』の試みの後、一度はジャンルと言語の外に出ることを試みながらも、庭鐘は結局再び元の位置へと回帰する。未遂の migration において、庭鐘はいったん外へ出ようと試みながらも再び元の位置へと回帰することにより、境界を攪乱するのではなくむしろ彼我の相違を固定化しているともいえよう。

「都賀庭鐘『呉服文織時代三国志』の日本表象」

歌舞伎の形式で書かれた『呉服文織時代三国志』について取り上げた。翻訳・翻案という営為と不可分である都賀庭鐘の作品においては、繰り返し越境がテーマとされるが、同時にその未遂性が指摘される。『呉服文織時代三国志』に至って作中人物の呉服(蔡[王炎])と文織(貂蝉)は越境を完遂するが、それは『日本書紀』の記述という典

拠に支えられてのことであり、回帰すべき帰着点としての日本の表象が越境の支柱となっているためである。

「都賀庭鐘の演劇観 徐渭の影響を中心に」

謡曲・歌舞伎・人形浄瑠璃の漢訳である『四鳴蝉』について、明・徐渭の影響を中心に、以下の三点をめぐって考察した。

・『四声猿』(1551-1553 にかけて成立)を範としたのは、明雑劇の形式が最も日本演劇を変換するのに適していたと考えられるためである。

・南曲の曲牌を用いたことについては、音楽的な考慮からというより、ひとり庭鐘のみならず、当時の日本の読者には明代の南戯が喜ばれたという背景があったこと。

・文体意識の面では、庭鐘の雅と俗に対する相反する志向性の中に、徐渭の「本色」を尊ぶ姿勢を通過した影響が想像されること。

これらの報告については、今後論文として発表する予定である。

#### (4) 今後の課題・展望

##### 共同研究の必要性

清楽や能楽・歌舞伎など日本演劇との関連について、専門的知見からの考察が必要である。特に、当初の計画では、清楽に関する先行研究の整理作業を行った後に中国側の地方戯に関する研究とリンクさせる予定であったが、背景知識の不足から地方戯との関連にまで考察を進めることができなかった。

個人による研究には限界があるため、今後はそれぞれの分野を専門とする研究者との意見交換、ひいては共同研究の可能性を探りたい。

中国戯曲の日本語への翻訳・翻案作品の分析

当初の計画としては、都賀庭鐘『四鳴蝉』の研究を踏まえ、今度は主に日本語への翻訳・翻案作品を対象とし、個別に作品の考察を行う予定であった。都賀庭鐘の諸作品から着手し、射程を広げてゆく予定であったが、定められた年限に完了することができなかったため、今後の課題としたい。

##### 中国戯曲研究史の整理

個別の作品分析と同時に、中国戯曲史をめぐり為された日中双方の近代の研究を参照しつつ、近代の研究者の評価との相違をあぶり出すことにより、江戸期当時の文脈における位置づけを検討することが必要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

及川茜「都賀庭鐘の演劇観 徐渭の影響を中心に」, 日本中国学会 第 67 回大会、2015 年 10 月 10 日、國學院大學(東京・渋谷区

及川茜「都賀庭鐘『呉服文織時代三国志』の日本表象」, 第四回中・日・韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2015 年 8 月 18 日、延吉市(中国)

及川茜「未知なる舞台への想像、話せぬ言語への翻訳 都賀庭鐘『四鳴蝉』をめぐって」, 世界文学・語圏横断ネットワーク 第 2 回研究集会、2015 年 3 月 20 日、東京外国語大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

及川 茜(OIKAWA, Akane)

神田外語大学・外国語学部・講師

研究者番号: 25870690

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: